ヨーロッパ麻酔科学会(Euroanaesthesia;ESA)2025　体験記

岐阜大学医学部附属病院麻酔科疼痛治療科
西川紗由美

1.はじめに

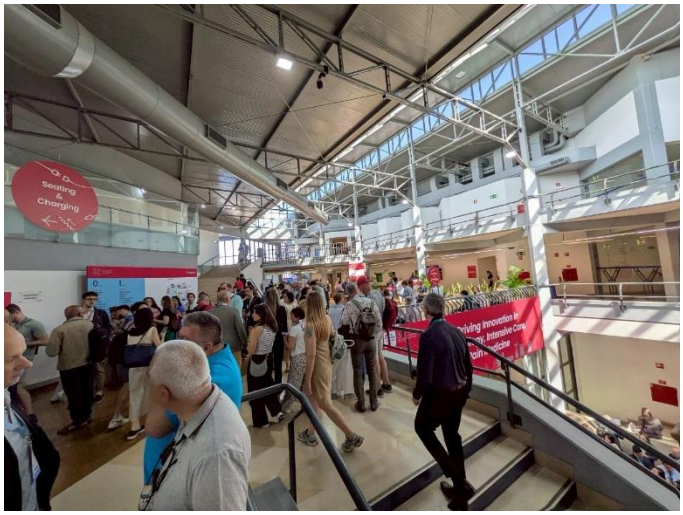
岐阜大学医学部附属病院麻酔科疼痛治療科の西川紗由美と申します。私は 2023 年に入局し、現在専攻医として臨床に携わらせて頂いております。当科においては数年前から若手の意欲向上、研鑽のために、専攻医が国際学会に参加させて頂く機会がありました。昨今の COVID-19 の大流行、世界情勢の理由等で参加できない年もありましたが、今回、紙谷教授からお声がけ頂き、私も参加できる運びとなりました。コロナ禍で就職したため、研修医 2 年時に初めて神戸で行われた日本麻酔科学会に参加しました。困難症例や新しい麻酔方法に関して全国津々浦々の先生方の話を聴き、麻酔に興味を持ち、麻酔科を志すきっかけとなりました。今回 ESA に参加できると伺った際には麻酔科医となった今、海外での学会に参加することでどんな出会いや新しい知識を得ることができるのか胸が高鳴りました。今回の ESA はポルトガルの首都、リスボンで 5 月下旬に行われました。日本からは直行便がないため、乗り継いで合計 24 時間弱の旅程です。

2.街の雰囲気

リスボンの街並みは日本で言うところの京都に近いものがあるように感じました。ビーチやリゾートというよりは伝統的な建築様式の建物が軒を連ねていました。石畳みの坂道に街が発展しており、トラムという路面電車が坂道を行き来しています。街自体も非常に綺麗で、活気に溢れていました。食事においても、米文化・出汁文化があり、どの料理も美味しく頂きました。貿易面においては、16 世紀にポルトガルの探検家であり、インド航路を発見したヴァスコ・ダ・ガマによりヨーロッパとアジアの交流が盛んになりました。日本における金平糖やカステラはポルトガル由来です。リスボンからバスで 15 分ほどの場所にある発見のモニュメントという大航海時代の功績を讃える記念碑の近くには世界地図が描かれており、日本が発見された年号もしっかりと記されていました。

3.学会会場の雰囲気・内容

さて、本題です。学会会場の雰囲気は日本と比較してカジュアルに感じました。日本における学会というと発表者はスーツに革靴またはヒールのイメージでしたが、白シャツにデニムパンツ、スニーカーで発表している方もいらっしゃいました。ポスターセッションでは議論が白熱すると、次の演者の発表が始まっても、前発表者と質問者が意見を交換している場面も垣間見えました。講義は日本と同じような雰囲気でした。いくつか聴講したもののうち、困難気道へのトラブルシューティングが私にとって衝撃的でした。普段私たちは挿管困難が予測される症例においてはビデオ喉頭鏡や気管支ファイバーといったデバイスを使用するのですが、その講義で紹介されていたのは、まず気管切開のように頚部に経皮的に穴を開け、そこから口腔内へガイドワイヤーを誘導し、口腔外からそのガイドワイヤーに挿管チューブを通してほとんど盲目的に気道確保を行うというものです。逆転の発想に驚きました。帰国後に上司に話すと日本でも昔からある方法とのことでしたが、非常に稀なようで、実際の患者さんに行なっている様子を動画で見ることができたのは私にとっては良い経験でした。また、肌の色で SpO2 の値が変化するのかというテーマの講義もありました。メラニンによって正しく評価できない可能性がありますが、正しい評価方法がまだ発見されていないため、正しくない可能性があると言うことを念頭においてモニタリングする必要があるという内容でした。このような内容は国際学会ならではだと思います。企業展示ブースにおいては、私たちが普段使用しているものもありましたが、MRI 対応の麻酔器や環境汚染の可能性が叫ばれている吸入麻酔薬、デスフルランの麻酔器に外付け可能な回収装置が展示されていました。どちらも日本ではまだ使用できないとのことですが、そういった装置が海外では発明されていることを知ることができました。



4.おわりに

今回ESAに参加し、多くのことを学ぶとともに、会場の雰囲気に圧倒されました。日本の学会に比べてオープンな雰囲気でした。私自身も今までに上司の先生方の手厚い指導の下、発表をさせて頂く機会が数回あったのですが、型にはまった、少し堅苦しい発表になってしまったり、質疑応答でも積極的なディスカッションがないままセッションが終わったりしてしまうことがありました。学んだことを臨床に繋げるだけではなく、自身の発表方法や他者の発表を聴く姿勢を見つめ直す良い機会となりました。夏に自身の発表も控えておりますのでぜひ実践したいと思う所存です。

最後になりましたが、今回このような機会を与えて頂いた麻酔科疼痛治療科教授　紙谷義孝教授をはじめ、医局の先生方に感謝申し上げます。